【北海道伊達開来高等学校】遠隔等を活用した大学等の協力による持続可能な社会を担う人材育成

新しい教育方法を活用した教科等横断的な学びのカリキュラムの概要

学校設定科目「だて学」

1　目的
地域を題材に探究的な学びを深めること

2　概要
・各教科の特色を生かし地元について知るとともに、将来、自らが地域にどのように貢献できるのか探究する。
・高等教育機関や事業所などと連携することで、発展的な課題の解決に取り組む。

【「だて学」に関連する各種分野】

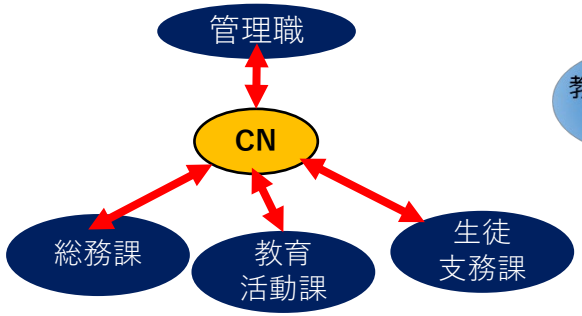
国語科分野	芸術（美術）分野
地歴・公民分野	外国語科分野
理工分野	家庭科分野
生命医療分野	商業情報科分野
保健体育科分野	

【高等機関等と連携した学びのイメージ】

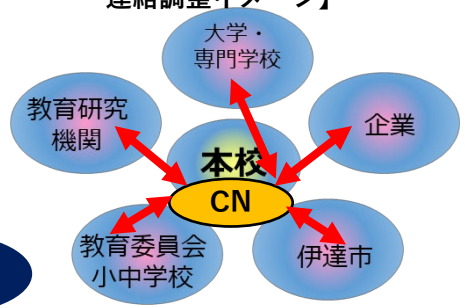
関係機関との連携・協働体制の構築方法

主にコーディネーター（以下「ＣＮ」という。）が次の役割を担い、関係機関等と連携・協力体制を構築。
①「だて学」のコンセプトを関係機関に説明
②連携・協力する関係機関等との連絡調整
③校内における連絡調整
④運営指導委員会やコンソーシアム会議の運営　等

【校内各課との連絡調整イメージ】



【関係機関等との連絡調整イメージ】



令和６年度の目標

①オンラインを活用して高等教育機関から講義を受けるなど、より専門的な教育を受けられる機会を設ける。
②生徒が設定した課題に応じて、継続的に専門家と研究協議を行い、指導・助言が受けられるよう、様々な高等教育機関等との連携体制を構築する。
③ＳＴＥＡＭ教育を柱とした教科等横断的な学習を推進するカリキュラムを開発する。

取組状況

①総合的な探究の時間及び「だて学」において、高等教育機関による遠隔講義を実施
②生徒が設定した課題に応じて、各分野の専門家と研究協議を行い指導・助言を受けるなど、ネットワーク体制を強化
③主体的に探究活動に取り組む生徒の増加により、道教委主催の探究活動成果発表会「探究チャレンジ」における上位大会への進出

成果と課題

○　探究活動を通じて特に身に付けさせたい能力としている「思考力」、「分析力」、「創造力」が向上し、最終的に生徒の自己肯定力が伸長した。
○　高等教育機関との連携により専門的な知識を得ることができ、質の高い探究活動を行うことができた。
○　地域企業と連携した授業を実施することができた。
●　探究活動を更に充実させる必要がある。
●　開発したカリキュラムを通じて身に付けた資質・能力の評価方法を確立する必要がある。

北海道伊達開来高等学校

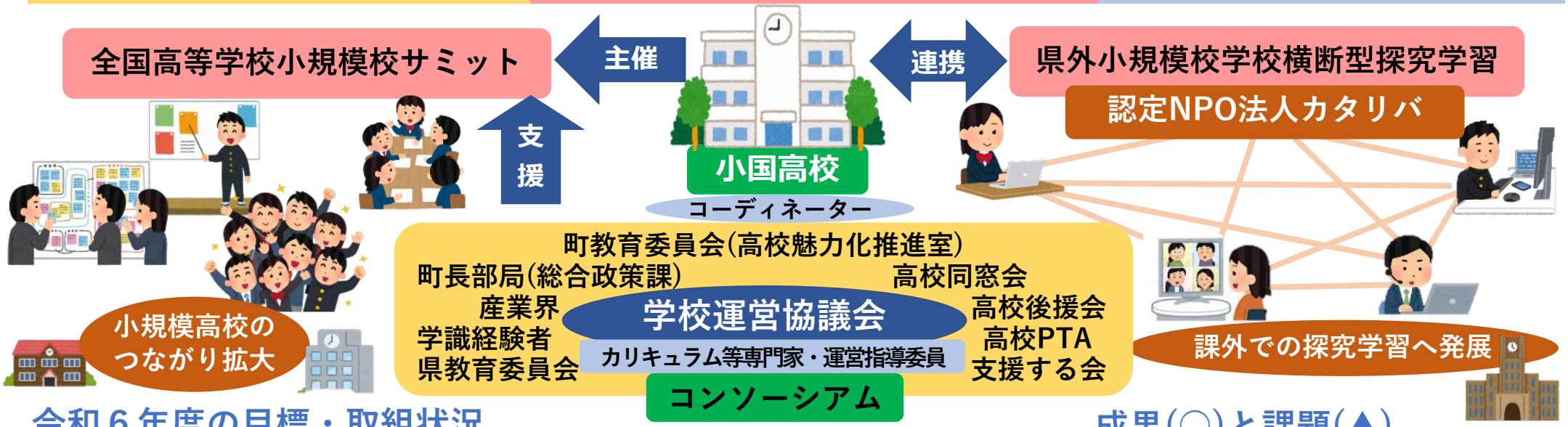
【山形県立小国高等学校】白い森未来探究プログラム

構想の概要

ＩＣＴ端末を用いた遠隔・オンライン教育を活用し、ＡＩ教材による個別最適化された学び直しと人的リソースや多様性を生み出しながら行う先進的な県外小規模校横断型探究学習の推進により、課題解決のための思考力･判断力･表現力等の資質･能力の育成を図る。

関係機関との連携・協働体制の構築方法

○小国町や小国町教育委員会との連携　○県外小規模校横断型探究学習のための連携　○連携協力を担うコーディネーター

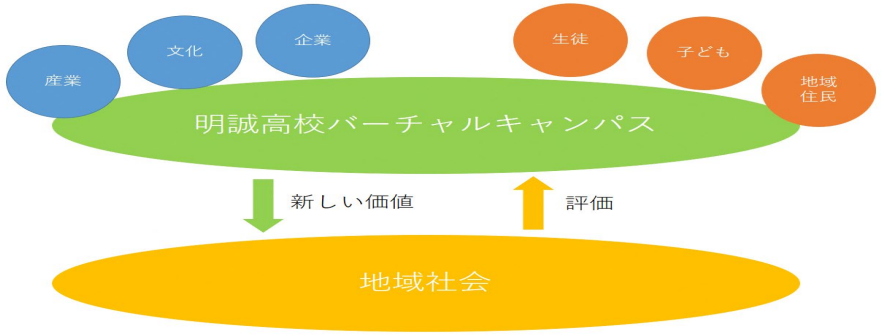


令和６年度の目標・取組状況

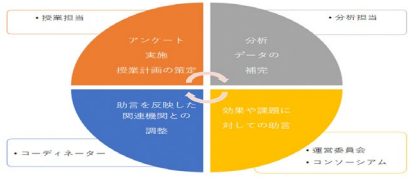
		成果(○)と課題(▲)
①AI教材の導入による教科学習の個別最適化 (★昨年の取組み＋新たな取組み)	・Qubena(１年生)と今年度は２年生と３年生の進学系の選択者にtokuMoを導入 ・マイプラン学習に加え、授業外使用頻度の向上を目指し、朝学習や休憩時間での自学自習に利用	○生徒の基礎学力の定着や苦手な科目・分野への取組が促進した ▲学校としての体系的な使用方法を見出すことができなかった
②教科等横断的な学びの推進と探究学習の個別最適化 (★今年度の重点取組み)	・地歴・公民、家庭科を軸となる教科として実践 ・時事的な内容をテーマにチームを組んで実践 ・各授業担当者のニーズに合わせて実践 ・前年度の取組をブラッシュアップして実践	○生徒の多面的・多角的な考えや感想を引き出すことができた ▲カリキュラム全体としてではなく単発的な実践にとどまった
③オンラインコミュニティの構築と進学希望者の学びの動機喚起	・進学希望者のグループ化・講習・面談の実施(小国町の協力)	○面談による動機づけや講習実施が、学習意欲の喚起につながった ▲自学習慣をつける働きかけを要する

【益田永島学園 明誠高等学校】明誠高校バーチャルキャンパス始動プロジェクト

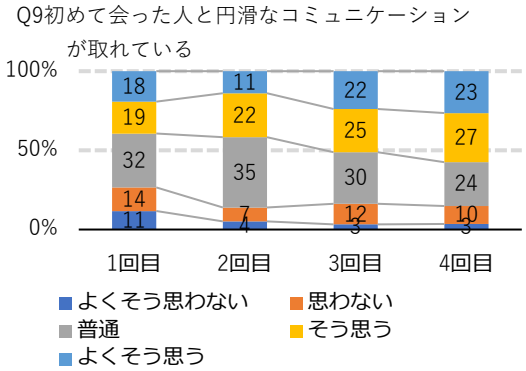
【概要】授業に「明誠高校バーチャルキャンパス」の設置運営を取り入れる。最大の特色はバーチャルキャンパスを用意するのではなく、設置から生徒に取り組ませることである。どのような産業、文化、企業とつながりたいか、つながるべきかを考え、仮想空間上に招待し、多彩な新しい価値の創出を目指す。
設置だけではなく運営においても生徒主体で進める。生徒は運営上のルールや課題、役割を話し合い、実行させることで、学びを自分事としてとらえる主体性を育む。また運営には、本学の学びを希望する子どもたち、地域住民にも参画してもらう。運営上生まれる新しい価値は地域に還元し、地域社会からの評価や、想定される経済的なリターンなどで、持続可能なキャンパス運営の実現を目指す。



【連携協働】本事業において多様な資源を活用することは必要不可欠である。多様な資源が学校現場において効果的に作用するためには、学校現場に適合する形に整備する必要がある。そのためにコーディネーターには運営指導委員会の意向、学校のカリキュラムの目指すところ、地域資源の希望を内包した、柔軟な提案と調整が必要である。コーディネーターは運営指導委員会とコンソーシアム、生徒のハブ的存在として主導的な役割を果たす。



【成果】
■特別授業一例
「映像技法のコツ」「絵コンテの描き方」「伝える」「限られた高校生活」「魅力を見つける」「魅力を伝える」「フィリピン人との英語話交流」「10代からの起業を考える」等
■授業講師一例
映像ディレクター、
海外の起業家
NPO法人代表(起業家)、
インフルエンサー、
デザイナー、
益田在住NPO法人代表　等
■「ますだの人」動画作成並びに広報
VC+リアルのハイブリッド
多種広報媒体の活用
■生徒たちの内面的変化
ポジティブな変化
VCによりリアルの壁が低ハードルに



【課題】
■人員配置
担当者の複数年継続による弊害
加配の難しさ
■突発的事案発生への対応
核となる担当者不在時の想定
■生徒・教員の時間確保
教員間並びに外部との時間調整
生徒の多忙感

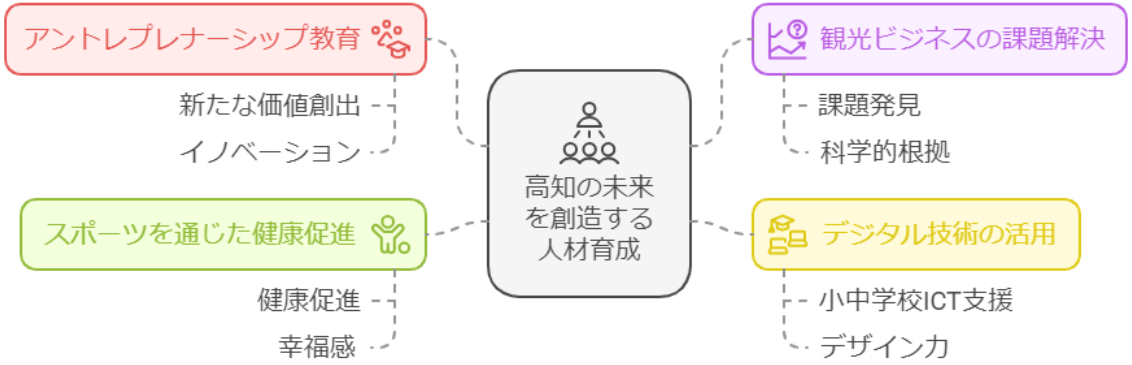
【令和6年度の目標】
創造的教育方法の指導法の確立を目指す
1：地域資源の整理と協働創造(継続)
2：生徒たちの内面的変化の変遷の把握(継続)
3：仮想空間内の教室の運営の確立(継続)
4：本事業成果の広報(継続)

【取組状況】
1.地域の資源や魅力を見つけ・知り・伝える動画作成
2.講師による特別授業
アンケートの実施
関係機関による分析
3.主体的なVC活用推進
(バーチャルキャンパス)
4.広報活動の展開
TVの取材放映
行政の広報媒体活用
SNSの活用

【高知商業高等学校】 市商地域創造プログラム　～地域を創造する市商～

市商地域創造プログラム　高知の未来を創造する人材育成　カリキュラム

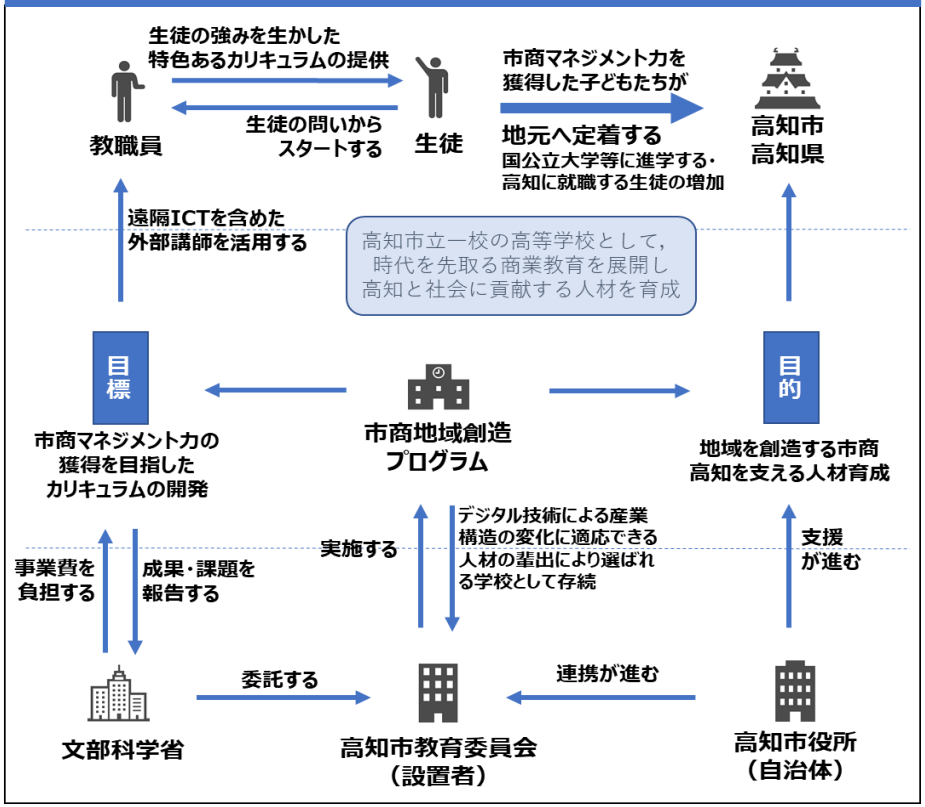
【概要】　科コース設定テーマに基づいて，地域の課題に対応する力及び市商マネジメント力の獲得をめざし，課題の発見やその解決策を見出し，実践・試行錯誤する探究的な学習等を通じて，高知の未来を創造する人材を育成する。



【生徒に身に付けさせたい市商マネジメント力7つの力とは】 ①コミュニケーション力 ②課題発見・課題解決力 ③プレゼンテーション力 ④講義理解力 ⑤ICT・英語活用力 ⑥察する力 ⑦失敗から学ぶ力

令和６年度の目標	取組状況
① 目指す生徒の姿(ｸﾞﾗﾃﾞｭｴｰｼｮﾝﾎﾟﾘｼｰ) 目指す教職員の姿を更新する	報本反始の精神と時代を先取る商業教育の充実に向けスクールポリシー・学校経営ビジョンの見直し。校是・教育方針・スクールﾐｯｼｮﾝの再整理を行う。
② 令和７年度課題研究を中心とした探究学習のグランドデザインを作成する	４つの科コースの生徒の強みを生かして研究を推進。令和４年度から３年間のカリキュラム開発をベースにさらに効果的に実施できるよう校内組織体制を検討中。
③ 教職員研修を講義型から対話型に変更し①②を令和７年度に反映させる	全日制教職員対象に，自分らしい視点で定義した課題・それを解決するためのアイデアを，組織で形にしていくための方法を体感する研修を年4回開催。
④ 課題研究発表会及び市商地域創造プログラム報告会を開催する	副市長や教育委員会，企業，運営指導委員，外部講師，県外指定校，保護者や校友会など約70名の校外の皆さまに参加いただき，生徒発表と学校報告のプレゼンテーションを2/13に実施。(一部オンライン対応)
⑤ 取組継続のための予算確保の方策を模索する	学校を探究学習やスポーツの拠点として整備し，地域の大人や子どもを対象に，高校生が主体となって推進する地域貢献プロジェクトを実施することにより，交流人口を増やし，ｺﾐｭﾆﾃｨを強化するための予算を準備中。

関係機関との連携・協働体制図



成果と課題

【成果】

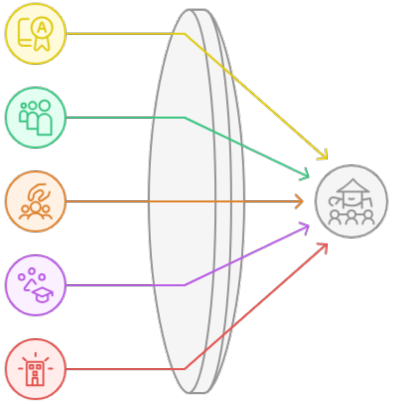
市商マネジメント力の伸長
ﾋﾞｼﾞﾈｽｺﾝﾃｽﾄ最優秀賞等

拡大した校外学習
昨年74件⇒今年104件

地域社会への関与
生徒主体地域活動増加

教職員の専門性向上
探究・教科横断型授業

学校取組の認知度向上
県外高校６校視察来校



【学習の課題】
・ 商業高校として経済・経営的な視点の組入れ

【総合的な成果】
・ 高知に就職・進学する生徒の割合増
・ 外部講師との連携体制構築による協働的・体験的なカリキュラム開発

【学校の課題】
・ 教科等横断型の横展開
・ スクラップの検討

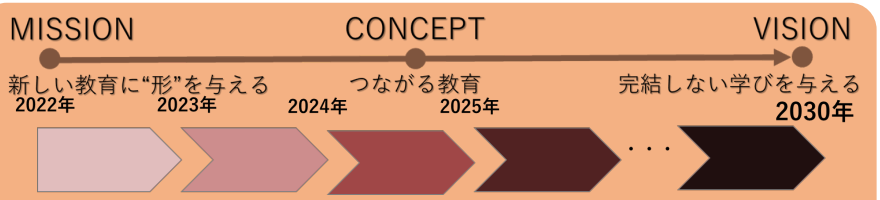
【福岡県立糸島高等学校】構想名「創：糸島グローカルリーダー」

構想の概要

１）感染症や災害の発生等の非常時においても、学びを止めない学校ネットワークの検証と再構築の検討
２）遠隔同時双方向型教育プラットフォームを活用した教科等横断型カリキュラムの創造と実践
３）高校教員が国内外の研究者や人材と自由に協働できる連携協力体制の構築

望ましい成果目標

１）eラーニング・学校ネットワーク環境が整備される。
２）ZoomやGoogleMeetを活用した教科等横断型授業が通常授業の中で計画的に導入・実践される。
３）高校教員が外部の人的資源と協働できる連携協力体制が構築される。



２０３０年のスタンダードな教育の在り方を考える

今後の課題

研究指定が終了後に何を残すのかについて検討し、この取組を継続する『三つの柱』を設定した。

県下最大のネットワークを生かした遠隔同時双方向型授業	
①	遠隔同時双方向型授業の研究授業を各教科で実施する。
糸高プラットフォームを生かした外部の人的資源の活用	
②	人材バンクを利用するマニュアルを作成して、総合的な探究の時間（糸高志学）で生徒・教員が利用する。
基礎学力の定着と学習時間の確保のためのeラーニングの導入	
③	学習時間の確保と学力の定着を目的として、教務部と連携して計画・導入する。

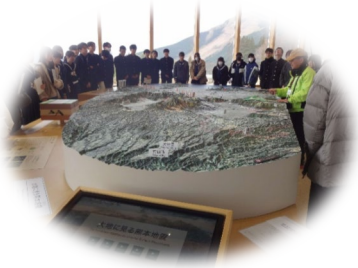
取組状況と成果

１）eラーニング・学校ネットワーク環境が整備される。		**評価**
（1）	校内のネットワーク環境の整備 ➡LBO（Local Break Out）によるデータセンターを介さない通信 ➡１２Gbps回線契約による通信速度１Gbpsの実現	◎
（2）	スタディサプリを活用したアダプティブラーニング ➡平均利活用41.1%、年間2回の到達度テストを実施 ➡EdvPathアセスメントによる非認知能力測定で利用生徒の学習意欲向上を確認	○
２）ZoomやGoogleMeetを活用した教科等横断型授業が通常授業の中で計画的に導入・実践される。 ３）高校教員が外部の人的資源と協働できる連携協力体制が構築される。		**評価**
（1）	遠隔同時双方向型授業の公開研究授業を実施 ➡国語科、地理歴史科、数学科、理科、外国語科（英語）で外部の人的資源（九州大学、専門機関等）を活用した遠隔同時双方向型授業を実施 ➡情報科の授業でOriHimeを活用した遠隔同時双方向型授業を実施 ➡論理コミュニケーションで全クラス遠隔同時双方向型授業を実施	◎
（2）	国際交流事業 ➡韓国瑞甸高等学校、韓国仁徳科学技術高等学校とオンライン交流	○
（3）	企業連携事業・地域連携事業 ➡株式会社ランハンシャの協力を得てプロジェクションマッピングを作成・発表 ➡EmbedSocial Japan株式会社、合同会社basicmathの協力を得てソーシャルメディアデータを活用した糸島の観光分析を実施し、第10回高校生国際シンポジウムに出場 ➡糸島高校OBの協力を得て、棚田を用いた農業に関する探究活動を実施し、第10回高校生国際シンポジウムに出場	◎
（4）	研究指定校同士の交流事業 ➡宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校とのメタバース交流 ➡佐賀県立伊万里実業高等学校農林科とのオンライン交流	◎
（5）	糸高プラットフォームの構築 ➡人材バンクの構築とオンライン通信プラットフォームの利活用 ➡看護・医療系クラスのカリキュラム開発	◎

【熊本県立人吉高等学校】　人吉 ・ 球磨ライジング構想
～新時代を切り拓き、地域の復興をかなえる、創造的な学びの構築～

令和６年度の目標

① 新たな社会（Society5.0）を牽引し、災害からの創造的復興を担う人材の育成
② 創造的復興に向けて、方法を思考する



連携・協働体制の構築

コーディネーター　→（連携・協働）→　熊本県立人吉高等学校
　事業推進委員会・評価開発委員会

運営指導委員会　→（指導・助言）→　熊本県立人吉高等学校

コンソーシアム　→（連携・協働）→　熊本県立人吉高等学校

運営指導委員会：大学　地方自治体　企業

コンソーシアム：地元企業　人吉市役所　地域コミュニティ

地　域　課　題　解　決　に　向　け　た　探　究　活　動

令和６年度の取組状況

ＢＹＨプログラムⅠ、Ⅱ
・講演会、フィールドワークの実施、成果発表会

人吉・球磨もやいすとプログラム
・熊本県立大学オンライン連携

クロスカリキュラム
・教科等横断的なクラスカリキュラム授業

先端技術（VR・AI等）の活用
・先端技術を生かした深い学びの実現

成果と課題

【講演会６回、フィールドワーク２回、探究活動成果発表会２回の実施】
成果：BYHプログラムⅡの探究活動成果発表会２回の実施、外部への提言
課題：指定終了後の取組継続のための仕組みづくりを行う。

【　球磨川流域圏バーチャルキャンパス９回、双方向授業２回　】
成果：オンラインを活用した熊本県立大学との連携、熊本県立大学生との意見交換
課題：オンライン連携で得られた専門的・多角的な視点を、個人探究活動へとつなげる。

【　クロスカリキュラムの授業実践５回　】
成果：教科等横断的な視点による教材研究及び授業実践
課題：生徒に日頃から「問い・仮説」を立てさせることの習慣化。

【　AI自動評価モデルを活用した感想文評価の試行１回　】
成果：AIを活用した生徒の「球磨川流域圏バーチャルキャンパス」感想文の自動評価
課題：ＶＲ・ＡＩを活用した教育方法の開発の実践。